

日本唯一の国立歴史民俗博物館「国立歴史民俗博物館」（千葉県佐倉市）で古代史などを扱う常設の第1展示室が、昭和58年の開館以来、初めてリニューアルされた。弥生時代の開始年代が約5000年さかのぼるなど開館以降に大きく進歩した研究成果を反映させた、大規模かつ意欲的な内容だ。（磨井慎吾）

## ネコ渡来は弥生時代？ 研究成果を反映

### ■半世紀で大幅変化

「この三十数年間、歴博は放射性炭素（C14）年代測定法などで多くの成果を生み出してきた。（展示は）40〜50年前の教科書で描かれた歴史像から、大きく変わった。今回の全面リニューアルの背景について、歴博の久留島浩館長は、同館が考古学分野で歴史像刷新に貢献した点を強調した。

6部構成となっている第1展示室の最初のコーナーは「最終氷期に生きた人々」。今回のリニューアルで大幅に拡充された旧石器時代（日本列島では約3万7千年前〜約1万6千年前）を扱う。



最終氷期、日本列島に暮らした

# 歴博展示室 36年ぶり刷新

まず出迎えてくれるのは、ナウマンゾウの実物大模型を中心に約4万年前の南関東の風景を再現したジオラマ。寒冷な気候を反映した針葉樹が目立つ植生は、現代の南関東とはだいぶ異なる。

### ■縄文の枠組みとは

次に目に入るのは、革なめしの作業を行う日本列島の初期の住人たちの模型だ。そのかたわらには、製革作業に使われた石器が並んでいる。毛皮を丁寧に加工した衣服をまとったその姿は、現代の極地に生きる民族とよく似ている。

「旧石器時代人」というと、かつては野蛮で原始的なイメージを持つ

たれていたが、実際はわれわれと変わらない現代人（ホモ・サピエンス）。当然、寒冷な環境に適応するための道具を工夫して作っていた」

そう説明するのは、コーナーを担当した同館の工藤雄一郎准教授。

1990年代まで、縄文時代の開始は気候が現代と同程度に温暖な後氷期に移行した約1万1千年前とされてきた。だが、最近の研究によって、実は最終氷期まっただ中の約1万6千年前に土器が出現したことが明らかになり、従来の縄文時代の枠組みが問い直される状況になっている。

### ■繰り上がった弥生

大きな研究進展があった弥生時代の展示も注目だ。

一般に水田稲作の開始をもってその始まりとされる弥生時代は従来、紀元前5世紀ごろとされてきたが、歴博の研究によって紀元前10世紀に九州北部で水田稲作が始まっていたことが明らかになり、

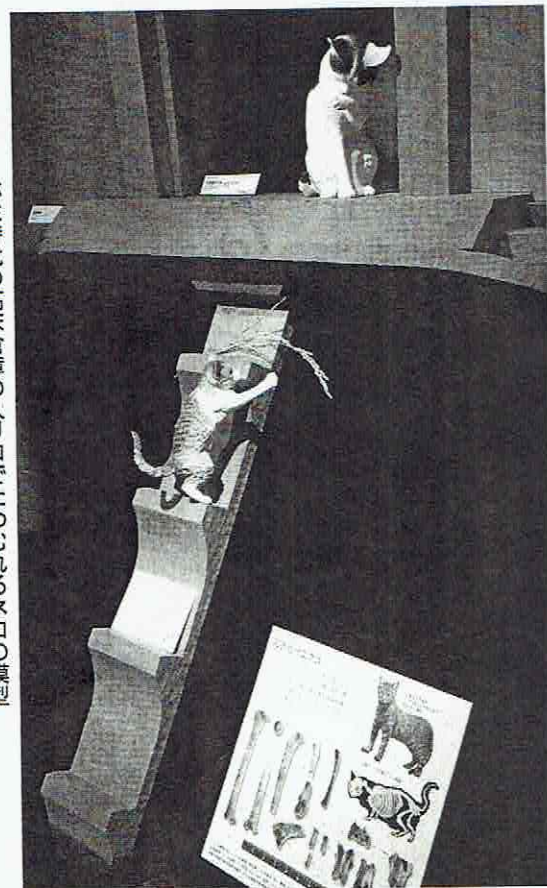
弥生時代の開始を約5000年繰り上げる説が定着しつつある。

コーナーを担当した藤尾慎一郎教授は「繰り上げの結果、稲作を中心にする人と、縄文的な文化で暮らしていく人が併存する段階が約600年にわたり日本列島に併存したことになる。そこをどう表現するかが一番難しかった」と明かす。

### ■大発見も反映展示

弥生時代の展示をめぐっては、最近の「大発見」も反映されている。穀物を保管する高床倉庫の再現模型の入り口に陣取るのは、かわいらしい2匹のネコ。従来、イエネコは重要書物をネズミの害から守るため、奈良〜平安時代に渡来したとされてきたが近年、長崎県壱岐市の遺跡から弥生時代中期頃のイエネコと推定される骨が出土。日本へのネコの移入時期が数百年さかのぼることになった。

藤尾教授は「穀物は相当、ネズミの害があるもの。ネコがいてもおかしくない」と話している。



弥生時代の高床倉庫の入り口でたわむれるネコの模型

## ▶▶ 国立歴史民俗博物館

一般600円。月曜休館。問い合わせは、ハローダイヤル03・5777・8600。